

## 嘘の重や、嘘の軽や

古都アヌラーダプラにHクラブという日本企業が観光ホテルを建てるという計画がありました。一九八〇年代のことです。日本人観光客に団体でそのホテルに宿泊していただいて、南伝仏教の聖地スリランカの古寺巡礼に誘う。尊いビジネスでした。

仏寺巡りならお年寄りが多かるう。ならば、日本語で対応するホテルマンが必要だろ。刺身を調理できるコックも必要だろ。その人材は現地を集めよう……と、トントン話が進んで、ホテルを経営する日本企業が社員募集の広告をスリランカの新聞に掲載しました。

それに応募した気立てのいいシンハラ人がいました。かれの名はペレーラ。セイロン観光局の職員だったのですが、職を辞しての挑戦でした。ペレーラはHクラブに採用され、日本でホテルマンとしての研修をすることになりました。

同時に採用された三人のシンハラ人とともに最初は日本語修得のために京都で三ヶ月を過ごし、次に博多へ移ってホテルで実地研修をし、そこでフロント業務を覚え、最後の研修地・東京の上野ではホテル経営全般を学びました。

ペレーラたちが上野のホテルで研修をしているあいだに、スリランカのジャフナで「タイガー」による政府軍兵士銃撃という事件が起こりました。一九八三年のことです。

「タイガー」はスリランカからの分離独立を目指すタミル人組織です。ジャフナ地域を中心としてタミル人のための国をつくろうというのですが、かれらはその手段としてテロルという暴力を選びました。テロルは国家政権を恐怖に落とすのですが、スリランカの場合、それはシンハラ人民衆による反撃という事態に流れていきましました。普通のシンハラ人が普通のタミル人を襲い、商店焼き討ち、強奪というかたちでテロルへの復讐がなされてしまったのです。兵士銃撃事件は「暗黒の六月」と呼ばれる民族暴動へと発展しました。そしてそれは瞬く間にスリランカ全土に広まり、シンハラ過激派のテロルをも誘発し国中が戦争状態になりました。国家錯乱。錯乱に至るからにはそれだけのわけが、つまり国の経営に矛盾が詰まっていたはずなのですが、矛盾の追及はシンハラ人からもタミル人からもなされず、だれも内乱解決の糸口を見出だせなかつたのです。

情況はもはや仏跡巡りの観光どころではなくなっていました。アヌラーダプラでもテロルの銃口が火を吹き、駅が襲われました。開業するはずだったホテルは竣工しないまま建築をストップ。計画は絶ち消えとなり、日本での研修をすませたペレーラたちは結局、職を失うはめになってしまったのです。

研修名目で企業からは手当が出ていましたから、かれら研修生には少しの元手が貯まっていました。それぞれに身の振り方を決めて、なかにはスリランカへ帰る人もいましたが、ペレーラは滞在のビザが切れるまでのあいだ、日本に残ってアルバイトで金を貯めることにしました。国で暮らす母のもとに送金する

必要があったからです。

一足先にスリランカへ帰るといふ同郷の友人にペレーラはそれまでに貯めていた金を預けて、母へ届けてくれるようにと頼みました。友人は「たしかに届ける」と約束をしてその金を受け取りました。

でも、その約束は「やはり」と言うべきでしょうか、何ヶ月たってもペレーラの母の手もとに届きませんでした。ペレーラは何度も母に電話で問い合わせたのですが、お金は受け取っていないとのことでした。

「で、どうしたの？ お金を預けた友だちの居場所はつかめないの？」

「いや、わかっているヨ。故郷の村にいるヨ」

少しでも貯金の額を増やしたいからと、ペレーラは失職してから私の料理店の仕事を手伝ってウエイター兼皿洗いのバイトを始めていました。

タオルで皿を拭きながらかれが言うには「預けた金は母のもとに届かなくてもかまわない」。何とも奇っ怪な言葉です。

「居場所がわかるなら、連絡を取って質せばいいじゃないか。預けたお金はどうしたかって」

「そんなこと、ワタシはしないヨ」

「しないって……、そんなあ……」

「かれはたしかにワタシに言ったんですヨ……。母にお金、届けるとね」

「そう約束したんだろっ？」

「そうですよ。だから、いいんです」

「いいと言っけどお金が届いてないんだよ。友だちがスリランカへ帰ってから何ヶ月たった？」

「三ヶ月ですよ」

「そんなにたっているのに届かないのはおかしいよ」

「でもこのあいだ、かれと電話で話したけど、その話は出なかったから……」

「話が出なかつたって、そいつに『預けたお金は母に届けたか』って訊かなかったの？」

「そんなこと、訊けないでしょ！」

ペレーラは口調を厳しくしました。

友だちに託した金の所在を預けた持ち主が訊く。その行為に何の不都合があるのか。私にはかれが怒りだした理由がわかりません。でもペレーラにしても、私の言うことはまったく意に反するようで戸惑っています。

「訊けないと言っけど、預けたのは大金だろう？」

「はい、五万円。母だつたら一年暮らせるお金だよ」

「うわあ、それじゃあその友人は大泥棒じゃないか。お母さんに届けるなんて、とんでもない嘘をついたもんだね」

「いや、嘘かどうかはわからないでしょ？」

「わからないって、お金は届いてないんだろっ？ それなら泥棒だよ。嘘について泥棒を働いたわけだよ、そいつは」

「でも、何か都合が悪くて、それで届けられなかったのかも……」

「おいおい。そんな人の良いことを言ってるよ、お金は一生戻って来ないぞ」

話しているうちにペレーラが消えた金への執着をあまり見せないのと、友人の裏切りを裏切りと感じていないのが読み取れて来ました。いつか五万円は母のもとに届けられるはず……、友人を危ぶむ気持ちを押し退けて、その楽観が、そして友人への信頼が、ペレーラの心の真ん中に陣取っているのです。

かれは寛容でした。そうした寛容がシンハラ人の心の中にある。でもこんな場合の寛容はいいことが、悪いことなのか。いや、それ以前のこととして、一体、その「寛容」はどういう理由で生まれ、そしてなぜ嘘と泥棒の行為が許せるのだろうか。私にはわかりかねることばかりでした。

シンハラ社会は「嘘」に甘い。誇張して言うなら「嘘」をについて手に入れた物は「盗み」にはならない……、どうもそういう気風があるのです。

そんなことでよく社会が維持できるものだと呆れるでしょうが、「盗人にも三分の理」は必ずあって、その理を通せば嘘や盗人が非難されないという道も開かれる。私たちもその道理を頭では納得できるはず

です。いや、三分の理に止まるならば納得できるといえるのは日本人のレベルです。シンハラ社会は「盗人には八分の理」というレベルにまで寛容で、法の上では違法になってもかれらの心理としてはそこまで盗みを許容してしまうのです。それも第三者が盗みの理を説いて窃盗された側を慰めるのではなくて、まさに当事者、盗まれた側が盗人の盗みを完璧に正当化し弁護する……。

ペレーラの五万円はもう十年を過ぎたというのにまだ母のもとには届いていません。そしてペレーラと友人との関係は今もうまく続いています。

シンハラ語には「ホラ・ボル」という言い回しがあります。

「ホラ」は「盗みの」、「ボル」は「嘘の」という意味の形容詞です。「ホラ・ボル」を直訳すると「盗み・嘘」になります。でもこのように字義どおりに訳してしまつては、この「重ね言葉」の本当の意味が伝わってきません。「ホラ・ボル」には「嘘つきは泥棒の始まり」といった意味合いが隠れているのですが、「ホラ/盗み」「ボル/嘘」という単語のそれぞれの意味が少しズれるのです。少し詳しくこの言い回しを見ていきます。

「ホラ・ボル」の「ボル」から取り上げてみましょう。

「ボル」はたしかに「嘘」という意味を持つのですがその嘘は日本人が思うような嘘とは違つのです。

「ボルウ！（嘘オー！）」

「ボル・キヤンダ・エパー！（嘘・言わないでー）」

「ボル・ナーッタ？（嘘・じゃない？）」

シンハラ語で生活するところとした言い回しによく出会います。何かにつけて「かまわな<sup>カマナ</sup>ない」と言うのはシンハラ人の口癖ですが、この「嘘オー！」のフレーズも負けず劣らず、世間に飛び交っています。

「ボルウー！」は「嘘オー！」。そういう意味です。そうなのですが、スリランカでは「嘘」が取り立てて問題にされない。ペレーラが被つた「事件」など日常茶飯事。いっどこでも起こるのです。

どこもかしこも「嘘」ばかり。白昼大手を振って「嘘」が歩く。スピーカーがなり立てる絵に描いた餅の選挙公約が年がら年中、世間を蹂躪しているようなものですから、おかげで皆、「嘘」には不感症に

なっています。

「嘘にもマナーがある」と言ったら笑われそうですが、シンハラ人の「嘘」のマナーを知らなかったばかりにスリランカで暮らす日本人は「不信」という文化ショックで心を傷つけられ落ち込む人が多いようです。またこの「嘘」が原因で「スリランカ嫌い」になる人もたくさんいます。

「明日、ここで逢いましょう」とシンハラ人と約束した。そして案の定、シンハラ人がその約束を破った。破った側はどつなる……？ いや、どつにもなりません。

自分ができないとわかっていることでもできると装ってかれらは「嘘」をつけるからです。こうした「嘘」はシンハラ人なら「ここで逢おう」と言った側も、それを受けた側も、実はあらかじめ承知していることなのです。ですから、どちらが約束を破ったにしても二人の関係が損なわれたりはしないわけです。

約束を破った側があとで「ポル・キウエネ（嘘・言ったネ）」と、からかい半分に揶揄されることもあります。でもそう言われたら「エへへ……」と照れ笑いでごまかせばいい。それで許されます。

なぜそうなのでしょう。

それは「約束」<sup>ポロンドウツ</sup>というシンハラ語のせいかもしれません。いえ、「約束」<sup>ポロンドウツ</sup>は本来のシンハラ語ではありません。タミル語です。シンハラ語には「約束」を表す言葉がそもそももないのです。掟への同意を示す「ギウイスマ」という名詞がありますが、これは英語で言えば agreement（同意）で promise（約束）にはなりません。シンハラ人にタミル語との接触がなかったならば「約束」はスリランカに存在しなかった。だから約束を破ることも嘘にはならなかった。嘘は社会的な逸脱行為ではないのです。

「約束」という、人を拘束する概念がそもそもなかったのですから物事を神経質に生真面目に考えないこ

とがシンハラ社会の遊泳術になる。しかし、まじめな日本人はどうしても“嘘つきシンハラ社会”に馴染めないようです。

日本人はスリランカ人の嘘に我慢がならない。“嘘”がつくる他人にやさしい人間関係など頭に思い浮かべようとしてもとんと想像ができません。研ぎ澄まされてやや固化した感のある日本社会には望むべくもないのがスリランカ式嘘社会の柔軟さです。“嘘”を許容するスリランカ社会の背景には人へのやさしさがあるのです。

“嘘”は互いの信頼関係を損なうというのが日本人にとっての当たり前のルールです。日本人の社会はそういう進歩を遂げて今の日本をつくった。いっぽうスリランカ人はそうした進歩を望まず、他人にやさしい嘘の息づく社会をつくりました。嘘を許容する社会をつくったのです。

私はチャランボランの日本人ですから「ボル・キウエネ」「エヘヘ……」式の、ルーズ・フィットな社会こそ性分にピッタリ合っていてホッとさせられます。シンハラ社会には嘘が多くても悪意の嘘というものは無い。シンハラ人伝統の村には悪意がないからです。山村や漁村に白昼まかり通る嘘は善意から生まれるものばかりだからです。

シンハラ人の行動パターンは完全に他人志向です。自分の行動を相手に添わせて決める。そういう傾向がシンハラ社会にはあります。人をもてなすために、また人に良かれと思って嘘を言う。そうした時の嘘が善なのです。シンハラ人の嘘は他人様を大事に思うがゆえに、つい言ってしまうもの。ホスピタリティ精神の現れと考えるとください。

「あれもあります、これもできます、ぜひとも当家へお越してください。ちょうど今、あなたのお気に召す料理を家の者が作っております」

スリランカでこういう誘いをいただくことはよくあります。そしてこの誘いには真と嘘がある。かれらは誘う気はなくとも「食事にいらつしやい」と言います。私はすぐに誘いに乗って出かけてしまうのですが、シンハラ人同士ならそのへんの兼ね合いはもちろん承知の上。言われた側はニコニコ首を横に振って、つまり同意の気持ちをからだで表現して先様の好意を、言葉の好意“としてありがたく受け取ります。スリランカの「ボル」はこうした「言葉の好意“、見立ての善意“から生まれます。

“嘘“の蔓延する社会なのに人びとが疑心暗鬼に染まらない。柔らかな嘘がある。シンハラ語のボルに八分の理があるというのはそうした気分を汲んでのことです。

そうした「ボル」なのですから話のなかにだけに収まっていてくれればありがたいのですが、おうおう嘘社会は夢の世界から蹴落とされて現実世界に転がり落ちて来ます。

金のない奴が「俺には金がある、おまえにやるヨ」などと言いふらして歩くだけならば、それは「ボル」ですみます。でも他人の金をくすめて「俺の金だ」と言い張れば、それは「ボル」ではなくて……、「ボラ」の世界になります。

「ボラ」は「盗みの」という意味。それと同時に「嘘つき」の「ごまかしの／ペテンの／詐欺師の」という意味があります。つまり、シンハラ語の「ボラ」は「法螺吹き」の「ほら」でもあるのです。

シンハラ語の「ホラ hora」は、第二音節を長音にして「ホラー hora:」にすれば「泥棒」という意味の名

詞になります。また、「カマ」を付けて、「ホラカマ」にすれば「盗み」という名詞になり、さらに「カラナワ」を付けて、「ホラカム・カラナワ」とすれば「盗む」という動詞になります。

つまり、シンハラ語で「ホラ／ホラー」と付く言葉があれば、それは何らか「盗み」と関係があるわけです。シンハラ人は「ボル」と言われてもまったく動じませんが、「ホラ」と言われれば只事ではなくなります。

さしずめ日本語の世界では「法螺吹き」の「ほら」を名指しされても鷹揚にかまえることができますが、「暴利」の「ぼる／ぼられる」となればうさん臭い犯罪のにおいが漂うのですから、「ほら」と「ぼる」の関係は日本とスリランカでは逆転しています。

シンハラ語には「ボル」以外にも「嘘」を意味する言葉があります。「パチャ」という単語です。

「タンノオさん、あなたがよく言うシンハラ語と似ている日本語、私も見つけました。パチャです。」嘘っぱちゃはシンハラ語にもあります。「パチャ」は口語だからあまりいい言葉ではないのですけどシンハラ語では嘘のことを言います。

そう私に耳打ちしたのは山形大学の医学部にスリランカから一年間の研修に来ていた医師兼公務員の女性、シヤンティさんでした。免疫研究の第一人者が山形大学にいたので山形への留学を希望して、彼女はその指導を仰いでいるとのことでした。

彼女のふだんの言語生活は、その使うべき条件が逆転していて変なのですが、英語と日本語です。日本人ばかりがいる大学の研究室へ行くと話すのは英語のみ。日本人研究者のための英語の先生になります。

それが山形駅近くの留学生会館に帰ると、そこでは外国人留学生と日本語で話をする。留学生には中国人の青年が多く、かれらは日本語しか話せないのでシャンティさんも日本語を使わざるを得ないのです。つまり彼女の日本での毎日日本人と話す時に英語を使い、外国人留学生と話す時は四苦八苦して日本語を使う。何とも奇妙にゆがんだ言語のパラドックス生活なのです。

日本へ来る以前に日本語を勉強したわけでもないのに、彼女の使える日本語は「こんにちは」「先生」程度でした。はじめて覚えた日本語のセンテンスは「次ワア、山形駅前、終点デス」。宿舍と大学のあいだをバスで通っていましたから、そのアナウンスで日本語のヒアリング練習が毎日できたのです。でも再びスリランカへ帰るまでの一年をへても日本語はそれ以上の上達を望めませんでした。

勢い、私と話す時はシンハラ語です。私のシンハラ語のブラッシュ・アップになるし、彼女にすれば溜り溜った言葉の不満から解放される。留学生ボランティアの紹介で私の家に遊びに来るようになって、月に一、二度は市内の寮から山里にある私の土壁の家に泊まっていきます。そうしてシンハラ語を洪水のように流して帰るのです。

話しているうちに「日本語の中にはシンハラ語がある」「日本語から直接シンハラ語を作り、また話す」という私の「ダイレクト・メソッド」にシャンティさんは痛く感心してしまい、彼女も日本語の中のシンハラ語に注意する癖がついてしまいました。

「嘘っぱちのばち」はシンハラ語で「パチャ」。これは「嘘ポル」のことです」と、「嘘っぱち」という日本語に彼女がシンハラ語を聞いたのにはそういう経緯があります。

大学で彼女の世話をする日本女性に「嘘っぱち」は三(嘘)だと教えられた。シャンティさんはシンハ

ラ人の聴力で「ばち」を「パチャ」に聞き取ってに結び付けた。シンハラ語では「チ」の音が「チャ」行にありますから、そしてこのほうが「チ」の位置づけとして正しいのですから「チャ」と「ち」が母音相通することに無理はありません。彼女が言う「口語のパチャ」ですが、この単語は野口忠司さんの『日本語シンハラ語辞典』（大学書林、一九九八年）にも「嘘」の見出し語の中に収録されています。

それにしても「パチャ」が「嘘っぱち」の「ばち」だったなどとは思いません。私たちにすれば「自棄っぱち」も「嘘っぱち」も、語尾の「ぱち」は「強調」の接尾辞ではない。そんな端切れに意味があるなどは考えてもみないことです。ところがシンハラ人の言語中枢は「嘘」という音を素通りして「ぱち」をすくい取る。言語文化の差が意味を取り取る部分をずらすのです。

「それは凄い発見だよ。『ばち』が『嘘』のことなら、その前にある嘘と同じ意味だね。これは混交」というやつだな。例えば、「シタベロ」はシタとベロがくっついて出来た言葉さ。ベロという言葉が日本語には先にあつて、聞き慣れない新語のシタがあとになって現れた時、それを頭に付けてシタベロとしたんだ。そうすると、ベロがもともと共通語としてあるのだからシタの意味も取りやすくなる……、それにしても見事なあ。『嘘っぱち』はもともとが『嘘っぱち』。重ね言葉だったのかあ」

「何言ってるかわかりません。日本語で言わないでくださいね。タンノオさんは英語の発音も下手だからそのコンタミ何とかもよく聞き取れない。シンハラ語で言いましょ」

「悪かった。まあ、『ばち』は『パチャ』で嘘のことを意味する。そう言うことだ」

「そうですよ。私も絶対、そうだと思います」

日本語の正当な学習には好ましくないのでありますがこれで語彙力を伸ばせるのなら語彙合わせも良しとしま

しょう。日本語とシンハラ語の場合、こうした「嘘っぱち」「パチャ」のような「空耳アワー」は単語力をつけるのにとっても具合がいい発見なのです。

発見という現象には連鎖反応という核分裂の性急さがあるらしくて、シャンティさんは「発見」を話しているあいだに、また新しい対応語を見つけてしまいました。

「絶対」という言葉もスリランカで使いますよ、タンノオさん。「サツタイ」と言います。研究室で仲良しになった日本人の女性はいつも「サツタイ、サツタイ」と言ってます」

絶対そうだから、絶対行くわ……などという言い回しを使う女性は増えています。「絶対に……ない」という使い古された言い回しではなくて、肯定文にも「絶対」を使って、相手の耳を引きつけてしまう語法です。その意味でなら「サツタイ」と似ているかも。でも「絶対」は「サツタイ」なのかあ……。

「いや、待って。それは「サツタイ」ではなくて「サツタカイ」じゃないか。シンハラ語の「絶対」は「サツタカイ」だったと思うのだけど」

少しうる覚えでしたが「たしかね」「疑いのない」という意味の形容詞に「サツタカイ」があるのを思い出しました。

「サツタカイという形容詞のことだよな？」

「ええ」

「だったら違つかも知れないな。「絶対」は副詞として使うからそのあとに動詞が来るんだ。しかも「ない」の形を取る。「絶対、食べない」とかね。サツタカイは形容詞だからそんなふうには使えないよ」

「タンノオさん。私の日本人の友だちはそんなふうに「絶対、食べない」なんて言いません。「絶対」と

しか言いません。これは *since* の意味です。友だちが使う「ゼツタイ」のあとには動詞なんて来ないですよ。それに「ゼツタイ」も「イ」で終わるから形容詞でしょう？ タンノオさんはそう言いましたね、以前に。これは副詞ではありません。それに「サツタカイ」は、会話でなら「サツタイ」でもいいのです。「サツタイ」はだから「絶対」です」

まいった。彼女の耳は日本語をシンハラ語として完璧に聞き取る力をつけていたのです。それも私以上に完璧に。シンハラ人は日本人とは較べるべくもないほどに耳がいい。こういう発見はいくらでもできてしまうのです。

さすがにシンハラ人だ、と感心していたらシャンティさんがこう訊いてきました。

「ところで疑問があります、タンノオさん。「ばち」の前のほうについている「うそ」というのは何ですか？」

「……………？」